

## 定例研究会要旨

日時：平成 26 (2014) 年 7 月 16 日 18:10~20:10

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「シベ語の疑問文 —平叙文との統一的な分析を目指して—」

発表者：児倉徳和 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教 /記述言語学、シベ語)

シベ語は、中国・新疆ウイグル自治区で話される、ツングース諸語に属する言語である。本発表では、シベ語において平叙文・疑問文の述部に共通に現れる小辞 =i に統一的な分析を与えることを目指し、シベ語における疑問文について形式と機能の両面から論じた。

まず小辞 =i が述部に現れる平叙文は、以下 (1) のように典型的には情報伝達の機能を持ち、小辞 =i が述部に現れる疑問文は、以下 (2, 3) のように典型的には情報要求の機能を持つ。

- (1)   bi       Gulja=de       siwe' gisuN       taci-Xe=i.  
私       [地名]=で       シベ語       学ぶ-た=i  
      <私はグルジャでシベ語を勉強した>
- (2)   we       ji-Xe=i.  
誰       来る-た=i  
      <誰が来た? >
- (3)   tere   bei#jiŋe=deri'       meda-me       ji-Xe=i       na.  
彼       [地名]=から       戻る-て       来る-た=i       か  
      <彼は北京から戻って来たか? >

これらの例からは、平叙文と疑問文は一見情報伝達と情報要求という相反する機能を持つように見えるが、特に疑問文は以下のような機能も持ちうる。

- ・確認：話し手は文の表す情報を聞き手に要求しているが、話し手自身が文の表す情報を全く持っていないわけではなく、既に確信度は低いものの何らかの情報を持っている。
- ・クイズ：話し手は文の表す情報について既に十分に確信度の高い情報を持っているにもかかわらず、聞き手から情報を応答として要求している。あるいは、情報を持っていない聞き手に情報を与えるべく、その情報について予測することを要求している。

- ・反語：話し手・聞き手がともに文の表す情報を持っており、かつ話し手が情報を要求する意図で発話していない。

本発表では、これら疑問文の非典型的な機能を踏まえ、小辞 *ni* の意味機能、およびシベ語における疑問文の形式と意味機能、疑問文が持ちうる語用論的機能について、言語主体の記憶領域と、そこで生起する情報処理のプロセスについてモデルを仮定して論じ、それぞれ以下のように結論付けた。

- ・小辞 *ni* は新情報を表す。平叙文に現れる場合は、典型的に聞き手にとっての新情報を表し、疑問文に現れる場合は、典型的に話し手自身にとっての新情報を表すが、特に疑問文がクイズの状況で用いられた場合は文の表す情報は聞き手にとっての新情報であると見る方が自然であることから、平叙文、疑問文共に話し手または聞き手にとっての新情報を表すとまとめられる。
- ・シベ語において疑問文は、文の表す情報が未確定である文と定義される。真偽疑問文では、文末詞 *na* により情報が未確定であることが表され、疑問詞疑問文では、疑問詞により情報が未確定であることが表される。
- ・小辞 *ni* を述部に持つ文は、聞き手に対して、文の表す情報を聞き手が既に持つ知識と照合し、新情報として記憶領域（知識データベース）に登録するよう要求するという語用論的機能を持つ。疑問文の場合は、文の表す情報が未確定であることから、典型的には文の表す情報を聞き手が既に持つ知識により補完されることが期待され、疑問文が典型的に持つ情報要求の語用論的機能は、この補完の要求であるといえる。ただしこれは、(疑問文の) 話し手が文の表す情報を持たず、かつ聞き手がその情報を持つ（と話し手が期待する）という場合のみであり、実際は話し手と聞き手が文の表す情報を持つか否か（また、どの程度確信度の高い情報を持つか）という発話の状況により、文は確認、クイズ、反語という種々の機能を持ちうる。